

# ソロモン諸島で咲かせたソフトボールの「花」、普及の最前線

文・写真 井上 栄 (青年海外協力協会)

第11回

## そして中高生大会の開催



いのうえ・さかえ / 1980年12月11日生まれ。愛知県出身。小学校からソフトボールを始め、大学までプレー。卒業後は愛知県公立中学校に体育教諭として勤務。2007年に退職し、青年海外協力隊に参加してジンバブエ共和国(07年6月~08年3月)、ソロモン諸島(08年8月~09年12月及び10年4月~11年3月)に赴任。帰国後は、星槎名古屋中での勤務を経て、公社・青年海外協力協会に所属して駒ヶ嶺青年海外協力隊訓練所に勤務。

**中** 高等学校での巡回指導が始まってから約1ヵ月、ソフトボールを始めた中高生からの要望により、開催することを決めた大会は2010年10月に開幕しました。08年10月に初めてソフトボールを授業の一環で行ってからちょうど2年後のことでした。ソフトボール隊員として赴任してからは半年しか経っていませんでしたが、実感はなかったのですが、何かを形にするにはこれほどの時間がかかっていたのかと、この文を書きながらあらためて感じています。

さて、大会開催が決定して以来、さすがに初めての試合が大会というわけにはいかないで選手数が18人に達していないチームには、可能な限り練習試合を設定しました。そのほか、審判をしてくれる人の手配、大会形式の決定、また大会を運営するために各学校への説明と協力依頼などを行いました。そして、大会開催のためのスポンサーを探しました。ソロモンでは、スポーツの大会で優勝するとトロ

フィーがもらえます。さらに、中高生の大会でも賞金が出ますが、参加者が希望したわけではなく、少くともソロモンの大会形式に近づけたらいいと思います。もちろん、トロフィー代、賞金以外にグラウンド使用料、審判・コーチへの交通費・謝礼金など少しづつ資金が必要でした。

また、ソロモンで活動しながら感じていた課題に、「目標のない中高生の存在」「無職の若者の増加」がありました。中高生大会は、この2つの課題に斬り込む手段でもありました。「大会での勝利」という目標を与えること、職を持たない若者に少なからずの謝金を払うこと。「目標



審判を据えてのオフィシャル大会。ピッチャーは初心者ながらもウインドミルで投げ込む

\*\*\*\*\*

ソロモン諸島 Solomon Islands  
 首都: ホニアラ (ガダルカナル島)  
 人口: 約53万人  
 言語: 英語、ビシン語  
 面積: 2万8,900km<sup>2</sup> (岩手県の約2倍)  
 大小約100の島々からなる英連邦の  
 一國で、4000もの集落が点在している。  
 地理的にオーストラリアとの関係が  
 深く、日本ともいろいろな面で友好を結  
 んでいる。国民の大半が農業・漁業  
 に従事しているが、近年は天然資源の  
 開発で注目を浴びる。

\*\*\*\*\*



に向かつて努力をする「努力したら成果が出る」という体験や労働の対価として「収入を得る」という体験をしてほしいからです。

そのためには、魅力的な大会運営が必要でした。スポンサー探しは難航しましたが、最終的にはソロモン中屋英基金というソロモンの学生に奨学金を援助している日本の団体が、30000ソロモンドルを援助してくれることになりました。

運営面での準備も整い、初めての大会には5校のエントリー

がありました。この5校によるリーグ戦を行った後、上位4校で決勝トーナメントを行うことにしました。各学校の時間割や行事を鑑み、火曜日と木曜日の授業後に試合の日程を組みました。授業後の開催なので、1試合目は15時から、2試合目は16時半から行うことにしました。5校のうち1校は、1試合だけ会場に現れたものの2試合目からは棄権になりました。4校でのリーグ戦となりました。初めての試合は、乱打戦とエラーの連続で日本ではおおよそ試合とは言えないレベルでお互いが20点以上を取る展開でしたが、それでも楽しそうにプレーしている姿や逆転を目指すが、本当にうれいものでした。

と、特製のピッチング練習場があり、朝練も行われていました。各学校の練習の成果もあり、2週間後の決勝トーナメントは、一つレベルが上がっているように感じました。

このトーナメントでは、リーグ戦1位の学校が破れ、2位と3位のチームでの決勝になりました。バントやスライディング、タッチアップなどすべての技術やルールを知るレベルではありませんが、1点を争う試合になりました。優勝したチームの狂喜乱舞、負けたチームの悔し涙は、今でも忘れることができません。巡回を始めてから大会が終了するまで約3ヵ月でしたが、それほど気持ちを入れて練習してくれていたのかと思うと本当にうれしかったです。

逃してはいけないうと新規の学校にもどんどん巡回に行きました。帰国まで3ヵ月を切っていたので、大会開催は難しいと思っていました。予想以上に大会開催の希望が強く、勢いに負けて大会を開催する約束をしてしまいました。大急ぎで準備を始めたものの新規の学校を含め、8校がエントリーすることに。



第11回大会優勝チーム。トロフィーとともにこの喜びの表情



試合後には、コーチからのアドバイスに真剣に耳を傾ける

5日間を予定していたリーグ戦が3日間で終わったため、リーグ戦とトーナメント戦の間に2週間の休みができました。試合以上にうれしかったのが、トーナメントでの優勝を目指し、今まで以上に練習の回数が増えたことです。週1回巡回指導をしていた学校には宿泊での指導を依頼されました。学校に行く

この大会は、テレビ取材もあり、私もソロモンのテレビデビューを果たしました(笑)。優勝したチームは、学校のトラックの荷台に乗り、首都に一本だけの大通りを優勝トロフィーを掲げながら世界大会にでも優勝したような大騒ぎで帰っていきました。

11年1月中旬になるとソロモンでは、新年度のスタートです。テレビの効果か口コミか、町で中高生から「ソフトボールをしよう」と話しかけられることが多くなりました。タイミングを

経験のある4校に多少なりとも追いつくための練習期間も必要です。コーチとしてかかわる人も3人から13人に、審判は、5人から17人に増えました。

結局、第2回大会は、3月11日に開幕しました。9日間31試合です。雨季のソロモンで1日も雨で試合が中止にならなかったのは、奇跡としか言いようがありません。それでも、決勝戦が行われたのは帰国日の2日前でした。

### Information 草の根からの発展

15カ国に54名の派遣実績のあるソフトボール隊員。ジンバブエ9名、シリア8名、インドネシア6名、エルサルバドル、ペルー、ブルガリア、ブラジル、グアテマラには各4名が派遣されていた。ソフトボールの世界ではまだ先例がないが、野球界では隊員の指導した選手が日本の独立リーグに挑戦した例もある。JICAボランティアの派遣以外には、2012年にスリランカ史上初となる野球場が外務省・草の根文化無償資金協力とJICA寄附金を原資として建設された。  
 HP / <http://www.jica.go.jp/volunteer>